
リボーンの世界へ（仮）

マデイラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リボーンの世界へ（仮）

【Nコード】

N6936Y

【作者名】

マデイラ

【あらすじ】

猫を庇い轢かれた少年がいた。轢いた車の主が歩いてくる方を霞む視界で視ると・・・白いスーツ？あれ？そっち関係の人？しかもそのスコップは何？・・・可哀想な少年に神の慈悲が。転生することになるが、なぜか地獄逝き・・・頑張る少年の物語。

マフィアばい人に殺されて

とりあえず自己紹介。俺の名前は中島秋人。

中学の制服がここまで似合わない人がいるのかという見た目・・・
OTZ

自己嫌悪に陥りながら学校を目指す。

「あゝ・・・どうやってグレようか・・・」

この悩みの原因は先輩とか先輩とか先輩とか。その見た目で真面目な中学生？何言ってるお前？ワロスwwwとか言われ続けたため・・・あの先輩いつか顎で使ってる。

信号に捕まりどうでもいい事を思いながら信号が青になるのを待つ。

「あ？」

ふと気付く。一匹の猫が道路を横断しようとしている。歩行者信号は赤だ。その時、高そうな車が走行してきた。スピードは一向に落ちることなく猫に向かっていく。

「やっべー！！間に合えよオイ！！・・・そろよっ！！」

猫にダッシュで近づき猫を蹴り飛ばす。手荒いが仕方ない・・・助かるんだから。

「あ・・・俺がダメじゃん」

体に衝撃が襲い、クラクションの音が響いた。

体が熱い・・・致死傷は体が熱くなると聞いたことがある。

頭がぼんやりする中、そんなことを考える。

車から人が降りてくる音が微かに聞こえる・・・救急車呼んでくれないかな？

「ちっ！！この糞ガキが！！車に傷が付いてるじゃねえか！！！！どうしてくれんだ！！」

・・・死にかけてんのに暴言はかれた。憎たらしいその男の顔を覚

えておいて呪ってやろうと霞む視界で視る。

・・・白いスーツにグラサン、金ぴかのアクセサリ、顔に切り傷。それにハゲ。

こいつ絶対人殺したことあるよ！マフィアだよ！

「俺の車に傷つけやがってくれてよオ。・・・こいつ殺して内臓売るか。顔潰して指紋焼いて樹海に埋めとけば大丈夫だろ。・・・さあ、やるか」

その声とともに俺にスコップが振り落とされた。

「・・・あん？ここは？」

目が覚めると白い空間にいた。

「ここは神界じゃ」

・・・変な爺さんが声をかけてきた。短パンにタンクトップ・・・リーゼント。

「あ・・・もしもし〇〇病院でしょうか？急患がいます」

「やめんか！！わしは精神患者ではないぞい！！」

「・・・ちっ。んで、あんた誰や？」

胡散臭い患者の疑いがある爺に声をかけた。

「（舌打ち!？）ワシは神じゃ」

「一遍死んでしまえ」

「なんでじゃ!？」

誰だってそうなると思うんだが。

「うっさい、黙れ。んで、なんで俺はここにいいの?・・・妄想変態神」

「ひどい・・・。オホン、簡潔に説明するぞい。お主がものすごい死に方したからな。友人の閻魔がお前の死に様を見ての。・・・お主を氣に行ったんじゃ。」

ええ・・・死に方氣にいるって。。。さすが、この爺の友人。感性が歪んでる。

「とゆうわけでの。閻魔のところに逝け（笑）」

爺の一声により、俺の足元が空洞になった。

「覚えていろオ！！！！必ずテメエを殴りに舞い戻ってやるう・・・」
ドップラー効果を残し堕ちていった。

冥界 in 秋人

「おぐう・・・あの爺。地面が固いのを先言つとけよ・・・。あん？
なにここ？」

秋人が見たのは魂が長蛇の列になりながらあるところに向かっている光景だった。

「秋人さまですね？」

列に身を任せながら進んでいると、赤い鬼に話しかけられた。

「ああ、そうだけど？」

「こちらです」

赤い鬼に連れられ執務室のようなところに通された。

「あら？お客さん？」

キャリアウーマンというべきだろうか？それとも女王様というべきだろうか？・・・姐さんと呼ぼう。

「・・・変なこと考えなかったかしら？」

「全然。・・・それよりここに呼んだのは？」

この姐さんエスパーか？

鬼が話を進めたそうにしていたので先を促す。

「そうでした。この方が秋人さまです。」

「ふん・・・そう。行っているわよ、赤鬼君」

女がこちらに興味深そうに見つつ、赤鬼を退出をさせた。

「まずは自己紹介ね。私があなたを呼んだ、閻魔よ」

「ああ・・俺は秋人だ。それより・・・なんで俺を呼んだんだ？」

「簡単なことよ。私のヒ・マ・ツ・ブ・シ・♪」

「ぶち殺すぞ!？」

「怒らないでよ。死んだのに生き還るかもしれないんだから」

「マジで!？」

「そうよ。この世界に転生してあることをするのよ」

閻魔様（尊敬を込めて）は素晴らしい、あるものを取り出した。

「・・・リボーンの漫画？」

家庭教師が最強の殺し屋で赤ん坊。ダメダメな主人公を矯正し立派なマフィアのボスにする物語だったはず。

「そうよ。私これ何度も読み返すほど好きなんだけどね」

「それで？俺をそこに転生させる理由は？」

「六道骸っているじゃない？」

ああ、あの体に六道全ての冥界を廻った記憶が刻まれているとかいうナポールの精か。

「それなんだけどね？あっちの世界の冥界と私の冥界・・・どちらの方が醜く残酷で凶悪であるか気にならない？」

「いや気にならないです!」

おkといえば死亡フラグだ!!

「だからね、思うの。私の地獄を刻み込まれたあなたと向こうの世界の冥界の記憶を刻まれた骸・・・戦わせて勝った方の冥界が醜く残酷で凶悪であるかが分かるんじゃないかなって」

こちらに妖艶な表情で閻魔がにじり寄って来た。

「いやいやいや!嫌ですよーそんなの!なんで冥界体験しなきゃなんないですか!それに骸とかはツナ君にまかせたらいいでしょうが!」

「ダメ。あなたに拒否権はないのよ?・・・だって私の気が治まらないでしょ?・・・それに、久々にイイ断末魔が聞けそうなんだ

もの♪」

この女！ドSだ！

「フフフフ・・・楽しましょ？冥界を全部体験できるなんてそう
ないのよ？」

「お助け・・・赤鬼の人・・・」

閻魔さまは嬉々とし、俺を引きずりながら、執務室を後にした。無
情にも俺は赤鬼さんに助けを求めることしかできたなかった。

マフィアばい人に殺されて（後書き）

地味に更新していけたらなあと思いました。

自分の中では六道輪廻VS輪廻眼×万華鏡写輪眼でいいかなと思いまして；；

いい能力があれば教えて下さい。匣兵器にスサノオは持っていきたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6936y/>

リボーンの世界へ（仮）

2011年11月20日21時40分発行